

山と博物館

「山と博物館」は自治会などを通じ全戸配布されるほか、市役所および関連施設で配置配布しています。また博物館公式 Web からご覧いただけます。

2024
秋号
第 69 卷 3 号

無料
Free

表紙の1枚 1
・低標高地の昆虫が高山植物を育む？
クルマユリはチョウ媒花植物か!?
さんぱく研究最前線 2・3
・高瀬川を流れる水の量はなぜ多いのでしょうか？
企画展特集 4
・「日本人とエベレスト ～その聖性から大衆化まで～」

展示・イベントのご案内／お知らせ 5
博物館のひろば／付属園だより 6・7
・ライチョウの雛の生育状況
山博友の会だより／お知らせ 8
・自然観察会「北ア高瀬渓谷 湯俣噴湯丘を訪ねる」



ク
ル
マ
ユ
リ
に
訪
花
す
る
キ
ア
ゲ
ハ

低標高地の昆虫が高山植物を育む？ クルマユリはチョウ媒花植物か!?

千葉 悟志

2024年7月17日～19日と8月1日～3日に白馬岳において、高山植物の生活史研究にかかる調査を今年も実施しました。

2023年発行の当館の広報誌「山と博物館 秋号（第68巻第3号）」の『クマユリの花には、昆虫がやって来るのか？来ないのか!?!』のなかで、花粉が運ばれて果実（蒴果）が実っているのか、それともほかの方法で実っているのかはまだ解明されていないことを紹介しました。

そこで、その年の秋に蒴果の成り具合を確認しましたが、たくさん実っている花序、まったく実っていない花序、1個あるいは2個が実っている花序などばらばらでした。

そして今年、ようやく花粉を運ぶ可能性を秘めたチョウの訪花を確認しました。それは、キアゲハ（アゲハチョウ

科）で、個体はその後、ハクサンボウフウ（セリ科）の葉に接近しては離れることをくり返しました（産卵は認められませんでした）。また同日、別の地点では、2個体のキアゲハがもつれ合うように飛び、そのうち、1個体が花で蜜を吸っていました。

高山帯では、低地から高山の幅広い範囲に生育するハエ類やハチ類が高山植物の花粉を送粉しています。そのため、生息範囲の広いキアゲハもまた高山帯で花粉媒介に役かっていたとしても、なんら不思議ではありません。

クマユリへのチョウの訪花は、別の山域では異なるチョウが訪花していたとの情報もありますので、クマユリとチョウ類による花粉媒介の関係性については、まだまだ調べる必要があります。

（市立大町山岳博物館 学芸員）

- ◆市立大町山岳博物館は付属園を含め、月曜日と祝日の翌日が休館です。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館となります。このほか、年末年始は休館となります。
- ◆開館時間は次の通りです。4～11月：午前9時～博物館：午後5時（入館は午後4時30分まで）・付属園：午後4時30分（入園は午後4時まで）、12～3月：午前10時～博物館・付属園：午後4時（入館は午後3時30分まで）。
- ◆毎月第3日曜日の「家庭の日」とその前日の土曜日は、「大町市民無料開放デー（長野県民割引）」として、大町市民の方は観覧料が無料です。また、この日は長野県民の方も団体割引料金で観覧いただけます。今季の該当日は10月19・20日、11月16・17日、12月14・15日です。この機会にぜひご来館ください。
- ◆次の方は通年、いつでも博物館を無料で観覧いただけます。《障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名／未就学児／大町市内小・中学校に通う児童・生徒／大町市在住の高校生／大町市在住の65歳以上の方》



博物館施設案内
はこちら

高瀬川を流れる水の量はなぜ多いのでしょうか？

鈴木 啓助

高瀬川と梓川

山岳博物館に松本から通っている身からすると、大町と松本は結構離れていると感じますが、実は隣り合わせです。槍ヶ岳と大天井岳を繋ぐ分水嶺（東鎌尾根など）に降った雨は、ちょっと北だと高瀬川を流れ下り、ちょっと南に降ると梓川を流れます。北に流れ大町を通る高瀬川と、南に流れ松本を通る梓川は、明科の押野崎で合流し、犀川となります。河川法では、犀川は上高地側の流路すべてを指しますが、上高地から流れ下る梓川と奈良井川が合流し、犀川になるとの考えもあります。しかし、東鎌尾根で別れ別れになった雨粒が、長旅の後に再び出会って犀川になると考えるのは、ちょっと情緒的すぎるでしょうか。

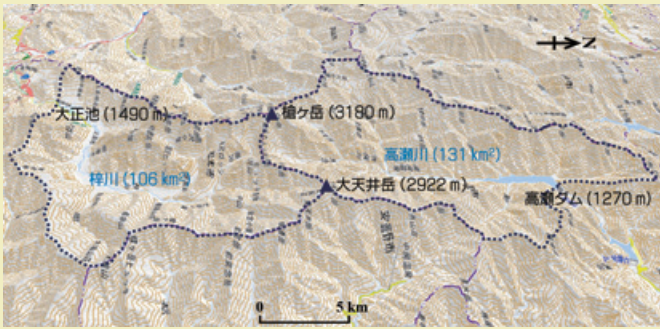


図1. 高瀬川と梓川（国土地理院地図に加筆）

高瀬川と梓川が隣り合っている様子を図1に示します。ダムを通過してしまうと、川を流れる水の量が変わってしまうので、高瀬川は高瀬ダムを、梓川は大正池を流域の末端としています。高瀬ダムの方が、大正池よりも標高が低く、流域面積としては高瀬川が梓川よりも2割以上広がりますが、高瀬川と梓川は飛騨山脈のふたつの主稜線に挟まれた兄弟流域です。

降水量と流出高

ある領域に降った降水（雨や雪）が集まり流れ下るある地点よりも上流側の領域を流域といいます。図1の槍ヶ岳、大天井岳、高瀬ダムを通る点線で囲まれた領域が、高瀬ダムを末端とする高瀬川の流域になります。流域にある期間に降った降水量は、同じ期間に流域から流出する水の量（流量）と蒸発散量（蒸発と蒸散=植物から放出される水）の和と同じになります。これを水収支式と言います。降水量と蒸発散量は、単位時間と単位面積あたりの水の高さ（mmなど）で表現されますが、流量は単位時間あたりの水の量（ m^3/s など）で表されます。比較するときには量の単位が異なると面倒ですから、流量も単位時間と単位面積あたりの量に換算します。流域の水平的な広がりが流域面積ですから、流域から流れ出る水の量を流域面積で割ると、単位時間と単位面積あ

たりの水の高さになります。これを流出高（mmなど）と呼びます。大町と松本の降水量を比較することができるよう、流域面積の異なる高瀬川と梓川から流れ出る水の量も、流出高を用いると比較することができます。

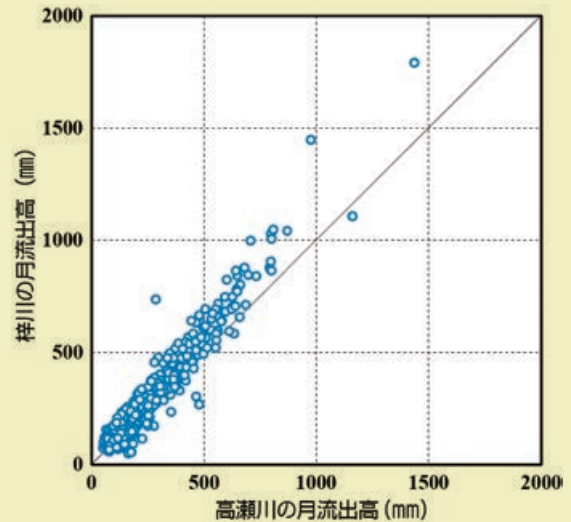


図2. 高瀬川と梓川の月流出高の比較

高瀬川と梓川の月流出高を1988年から2023年までの期間で比較すると（図2）、概ね1：1の関係になることがわかります。高瀬川よりも梓川の月流出高が大きいのは、ほとんどが梅雨の時期です。梅雨の時期の雨をもたらず風系は南風が多いので、南側の梓川の方が流出高も大きくなると考えられます。

流出高が降水量よりも大きい

高瀬川には、上流から高瀬ダム、七倉ダム、大町ダムがあります。梅雨に入る前の雨が少ない時期に、高瀬ダム湖から湯俣をめざす途中の高瀬川の水量の多さに驚かれたことはありませんか。

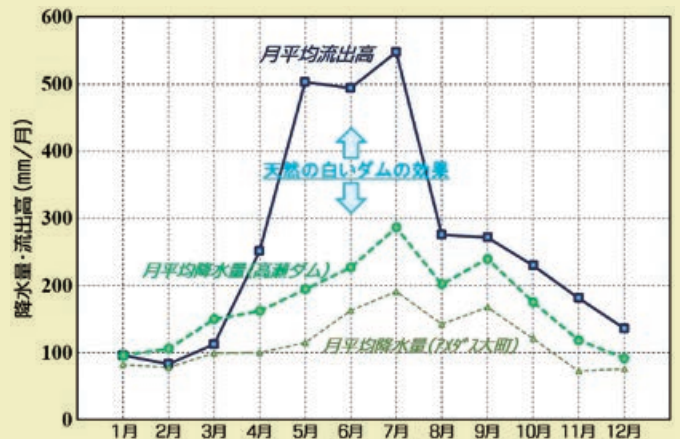


図3. 高瀬川の月平均流出高と月平均降水量

1988年から2023年までの期間での、高瀬川の月平均流出高と、高瀬ダムとアメダス大町における月平均降

水量を図3に示します。一般に、標高が高くなると降水量は多くなりますから、標高1278mの高瀬ダムの月平均降水量が、標高784mのアメダス大町のそれよりも多いのは理解できます。しかし、5月から7月までの流出高は、両地点の降水量よりも圧倒的に多くなっています。槍ヶ岳や大天井岳では高瀬ダムよりも降水量は多いと考えられますが、想定される流域平均降水量よりも、5月から7月の平均流出高は多くなっています。この多くなっている量は、流域内に残っている積雪が融けたためと考えることができます。冬の間に流域内に降り積もった積雪は、4月頃から融け始めますが、太陽高度が高くなり日射量が大きくなる5月から7月の間に大量に融けます。降り積もり始めてから半年間も積雪が流域内に貯留されますから、雪は「天然の白いダム」と呼ぶことができます。高瀬川流域では7月中にはほとんどの積雪が融けますので、8月には月降水量に見合うような月流出高になります。先ほどの水収支式は、高瀬川では春から夏にかけては成立しないことになります。年間では、水収支式が成り立つはずですから、高瀬川流域での冬期間の降積雪量が、いかに多いかがわかつて思います。

高瀬ダムでの降水量の年々変動

今後の高瀬川流域の水資源の変動を考えるには、これまでの変動を調べることが不可欠になります。1984年から2023年までの、高瀬ダムでの年降水量の年々変動を図4に示します。

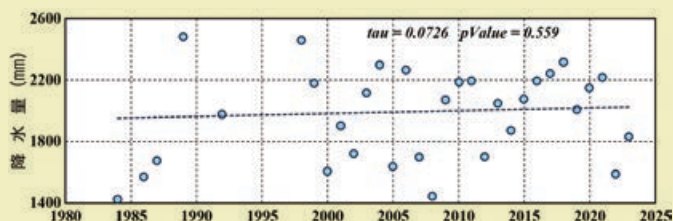


図4. 高瀬ダムでの年降水量の変動

高瀬川流域は標高差が大きいですから、高瀬ダムでの年降水量が、必ずしも流域平均降水量の変動を示すわけではありません。さらに、観測初期には欠測が多いのですが、図4からは、高瀬ダムでの年降水量には統計的に有意な増減傾向は認められませんが、少なくとも減少傾向にはないようです。

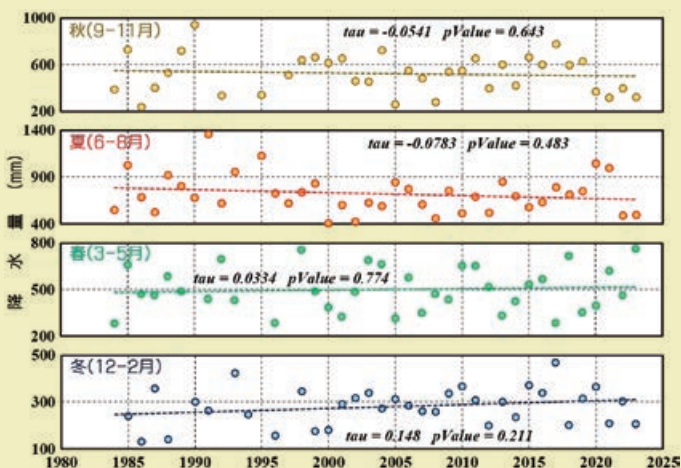


図5. 高瀬ダムでの季節降水量の変動

次に、高瀬ダムでの季節降水量の変動を図5に示します。観測期間では、季節降水量にも統計的に有意な増減傾向はありません。しかし、冬季と春季にはわずかに増加傾向、夏季と秋季にはわずかに減少傾向が認められます。

高瀬川流域での年流出高の年々変動

次に高瀬ダムから上流の高瀬川流域における年流出高の年々変動を見てみましょう。

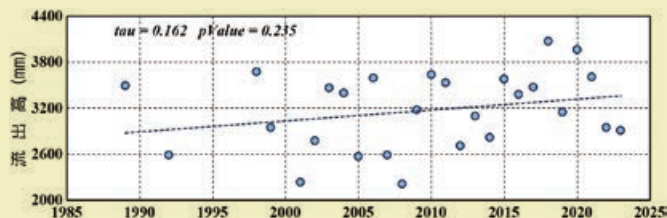


図6. 高瀬川流域での年流出高の変動

高瀬川での年流出高の増加傾向は、統計的に有意な変化ではありませんが、年降水量に比較して増加の度合いが大きいです。測定誤差がありますから、断定はできませんが、高瀬ダムよりも上流域での年降水量が増加していることが推定できます。

天然の白いダムの効果（融雪量）の変動

高瀬川流域では、5月から7月の間は、降水量に比べて流出高が極めて大きくなっており、両者の差は流域内に冬期間に降り積もった雪がこの時期に融けるためであることを示しました。この「天然の白いダム」の効果（融雪量）の年々変動を図7に示します。

5月から7月の間は、流域内に雨としてもたらされる水量がありますので、この期間の降水量の変動も示します。流出高と降水量は、統計的に有意ではありませんが減少傾向にあります。この期間の融雪量は、流出高から降水量を差し引いた水量と考えることができます。融雪量の変動は、統計的には有意ではありませんが、増加傾向が認められます。このことから、1988年から2023年の間では流域内の積雪量は増加傾向にあると考えられます。

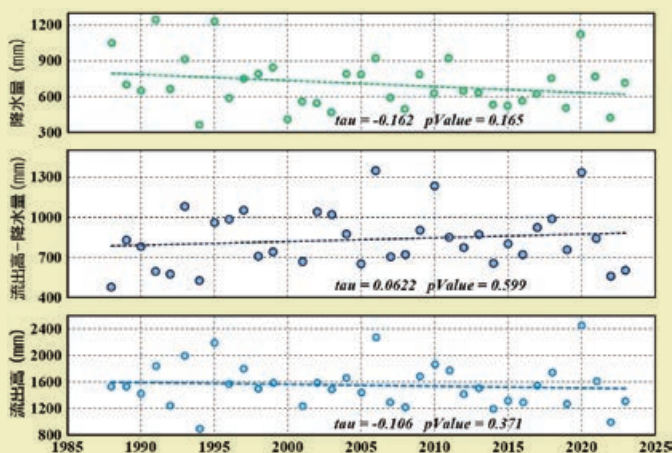


図7. 高瀬川流域での白いダム効果（融雪量）の変動

【謝辞】

ここで使用した降水量と流量のデータは、東京電力ホールディングス株式会社から提供していただきました。

(市立大町山岳博物館 名誉館長)

北アルプス国際芸術祭2024パートナーシップ事業

「日本人とエベレスト ～その聖性から大衆化まで～」

主催：信州の山岳文化創生会議／共催：市立大町山岳博物館

会期

10/19^土

～12/1^日



1953（昭和38）年イギリス隊の初登頂から70年の間に、エベレスト※1は大きく変貌してしまいました。その象徴が、2019（令和元）年5月23日、公募登山者を含む354人の登頂です。高度情報化社会の深化と広がりの中で、大衆化の様相はとまりません。

世界最高峰であるがゆえに、エベレストの「聖性」と、それが失われていく「宿命」と「呪縛」、その過程を、エベレストへ挑んだ日本人登山家の写真を介して追っていきます。

※1 エベレスト

標高8,848mの世界最高峰。中国（チベット）名チョモランマ、ネパール名サガルマータ。

各国の登山隊によるエベレスト登頂の歴史は、1921（大正10）年のイギリス隊による第1次遠征から始まり、1953（昭和28）年のイギリス隊による初登頂（登頂者はエドモンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲイ）以後、1956（昭和31）年のスイス隊、1960（昭和35）年の中国隊、1963（昭和38）年のアメリカ隊、1965（昭和40）年のインド隊、そして、イギリス隊のヒラリーとテンジンによる初登頂から17年後、1970（昭和45）年に日本隊による登頂（世界第6登）が続きしました。

今回の企画展では、1970（昭和45）年日本隊の登頂※2、1975（昭和50）年女性初登頂など、日本隊の活動を中心に、エベレストの聖性から大衆化までの過程を俯瞰した、日本人登山家たちの貴重な写真30数点を展示します。ぜひご高覧ください。

なお、会期中、エベレスト登山に関する講演・シンポジウムも開催します。こちらの企画展関連催しにも、ぜひご参加ください。

※2 1970（昭和45）年日本隊の登頂

1970（昭和45）年5月11日に日本山岳会エベレスト登山隊第1次アタック隊員の松浦輝夫と植村直己、翌12日には第2次アタック隊員の平林克敏（長野県大町市出身）とネパール人現地協力者のチョタレーが登頂に成功しました。

この登山隊は松方三郎隊長ら隊員39人で組織され、装備・食糧など約32トンを使用し、その登頂成功は「史上最大規模の物量作戦による」といわれました。同登山隊では、極地法による登山によって、エベレスト南東稜から登頂を果たしました。一方、同登山隊で同時に計画された当時未踏のエベレスト南西壁初登攀は、標高8,050mにまで達しましたが、ルートが状況が悪いことなどで成功には至りませんでした。その後、1993年（平成5）年に群馬県山岳連盟隊によって冬のエベレスト南西壁が初登攀されています。

展示・イベントのご案内

北アルプス国際芸術祭2024パートナーシップ事業

企画展 「日本人とエベレスト ～その聖性から大衆化まで～」

1970年日本隊の登頂、1975年女性初登頂など、日本隊の活動を中心に、世界最高峰「エベレスト」登頂に挑んだ日本人登山家の足跡を紹介する写真展です。

- 主催 信州の山岳文化創生会議
- 共催 市立大町山岳博物館
- 協力 日本山岳会、読売新聞、毎日新聞社 ほか
- 期間 10月19日(土)～12月1日(日)
- 時間 10・11月：午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
12月：午前10時～午後4時
(入館は午後3時30分まで)
- 会場 当館 特別展示室
- 費用 通常の観覧料(常設展と共通)が必要です

大町自然探検隊 地学教室

「河原の石ころをさがそう」

箆川は蓮華岳から爺ヶ岳を源流域として、かつての爺ヶ岳カルデラの主要部を侵食する河川です。

この催しでは、河原の石ころの岩石標本作りを楽しみながら、北アルプスの成り立ちについて学びます。

- 講師 市立大町山岳博物館 専門員 竹村健一
- 協力 大町エネルギー博物館・山岳博物館友の会
- 期日 10月13日(日) ※雨天中止
- 時間 午前9時30分～午前11時30分
- 会場 箆川の河原(心笑館キャンプ場横)
- 集合 大町エネルギー博物館駐車場
- 対象・定員 どなたでも・20名(先着順)
※小学生以下の方は保護者同伴でご参加ください
- 参加費 200円(岩石標本ケース代として)
- 申し込み 10月11日(金)までに電話・FAX・Eメールまたは直接、当館へ※

地学教室／企画展 講演・シンポジウム 申し込み先

市立大町山岳博物館

電話：0261-22-0211
FAX：0261-21-2133
Eメール：sanpaku@city.omachi.nagano.jp
※先着順。定員になり次第締め切ります。

企画展「日本人とエベレスト」関連催し 講演・シンポジウム

企画展関連催しとして、エベレスト登山に精通した講師・パネラーをお招きし、会期中に講演・シンポジウムを開催します。

- 講演「写真で見るエベレスト日本隊」
講師：神長幹雄さん(株山と渓谷社 元出版部長)
- シンポジウム「エベレスト 聖性からその喪失まで」
パネラー：古野淳さん
(日本山岳会 前会長、
日大エベレスト登山隊 北東稜初登攀)
倉岡裕之さん
(登山家・山岳ガイド、
エベレスト登頂11回 日本人最多)
神長幹雄さん(編集者、日本山岳会)
コーディネーター：扇田孝之さん
(信州の山岳文化創生会議委員)
- 主催・共催・協力 企画展と同じ
- 期日 11月17日(日)
- 時間 午後1時30分～午後4時
- 会場 当館 講堂
- 対象・定員 どなたでも・40名(先着順)
- 参加費 無料 ※企画展の見学には通常の入館料(常設展と共通)が必要です
- 申し込み 11月15日(金)までに電話・FAX・Eメールまたは直接、当館へ※

北アルプス国際芸術祭2024パートナーシップ事業 令和6年度 地域発元気づくり支援事業

安曇野アートラインを巡り AR(拡張現実)を体験しよう

AR(Augmented Reality)とは、現実の空間にバーチャルの視覚情報を重ねて表示することで、目の前にある世界を仮想的に拡張する技術です。この技術を活用した新しいかたちの芸術をお楽しみください。

- 主催 安曇野アートライン推進協議会
- 期間 9月13日(金)～11月4日(月・祝)
- 会場 安曇野アートライン推進協議会加盟館のうち当館を含むAR作品公開館14館
- 費用 AR作品公開館によっては入館料が必要な場合がありますが、当館は入口横の外壁にてAR作品を無料でご覧いただけます。
- 作品鑑賞方法 鑑賞に必要な専用アプリのダウンロード方法などの詳細は各公開館でご案内しています。
- 特典 期間中、2館以上を有料入館された方にオリジナルグッズ進呈(無くなり次第終了)

**関電トンネルバス開通60周年
トロリーバスの車輻部品資料を展示**
令和6年8月1日(木)～10月14日(月・祝)



扇沢と黒部ダムを結ぶ「関電トンネルバス」が今年開通60周年を迎えるのを記念して、大田市プロモーション委員会とコラボし、関電トンネルで長年活躍したトロリーバスの車輻部品を資料展示しています。

鉄道に区分され独特の外観を持つトロリーバスを育んだ関電トンネルには、かつてその掘削工事において、黒部ダム建設の資材輸送ルート確保の命運を賭けた破碎帯との過酷で壮絶な闘いがあったこと、また黒部ダムの完成によって関西地区の慢性的な電力不足が解消され、戦後日本の経済復興の礎の一つが築かれた歴史があったことを、あらためて紹介する機会としています。

ライチョウ応援プロジェクトの御礼

令和6年4月26日(金)～7月24日(水)



184名の皆様にご支援を賜りまして、目標金額250万円を超え、279万5千円の寄附金が集まりました。多くの皆様のご支援に深く感謝申し上げます。ささやかながら当館からも御礼といたしまして、ライチョウに関する情報を希望者へ配信しております。

今年度当館で孵化・生育している雛は現在(8月下旬)8羽で、9月に中央アルプスへ野生復帰させる予定となっております。また、成鳥はオス4羽、メス3羽の計7羽を飼育しております。いただいた寄附金はこれらのライチョウのより充実した飼育のため、大切に活用させていただきます。

中学校の職業体験学習を受け入れ
令和6年6月11・12日(火・水)、7月18・19日(木・金)、8月22・23日(木・金)



当館では、学校教育におけるキャリア教育推進に協力しており、年間を通じて随時、市内や近隣市町村の中学生や高校生の職業体験学習の受け入れを行っています。今年は、これまで6月に八坂小中学校、7月に高瀬中学校、8月に美麻小中学校の生徒のみなさんが実習を行いました。

各学校の実習では、基本的に1日目は博物館の仕事や施設の役割などを学び、受付業務などを体験。2日目は付属園で動物の飼育、標本作製や資料登録などを体験。

将来の進路の参考にさせていただくとともに、裏方の仕事を体験することで博物館をより身近に感じていただければ幸いです。

令和6年度博物館実習の受け入れを行いました

令和6年7月30日(火)～8月4日(日)



山岳博物館では、学芸員の資格取得を目指す大学生を対象として、博物館実習の受け入れを行っています。本年度は5名の実習生を受け入れ、調査・研究、収集・保管、教育普及・展示を軸とした学習をとおり、博物館の仕事について学んでいただきました。最終日にはお客様に対して実際に館内のガイドを行っていただき、幅広い層のお客様に対して解説をする難しさを実感していただくなど、有意義な6日間となりました。

来年度以降も実習の受け入れを予定しており、将来学芸員を目指す学生の支援を続けてまいります。

山岳博物館のライチョウ保護飼育活動への寄附金をいただきました
令和6年7月23日(火)



博物館のライチョウ飼育事業のために、株式会社北アルプスブルワリー様より金五萬円の寄附金をいただきました。

当館では、ニホンライチョウの生息数の回復を図るために、環境省や日本動物園水族館協会と連携して、飼育研究を実施しております。現在当館では、人工繁殖させたライチョウの雛を、高山植物が消化できるような腸内細菌を整えて、高山で生活できるように育てあげる取り組みをしています。秋には雛を中央アルプスの野生に戻せるよう努力しております。いただきました寄附金は飼育繁殖に関わる経費として有効に活用させていただきます。

自然ふれあい講座「みんなで温暖化ウオッチ セミのぬけがらを探せ！ in大町」を開催しました

令和6年8月3日(土)



長野県環境保全研究所と共催で、地球温暖化が身近な自然にどのような影響を及ぼしているのかを知るためにセミの抜け殻を探し、その種類や数を調べました。平成25年より毎年同じ場所で続けることで、自然の変化を調べているものです。

9名の参加者は大町公園でセミの抜け殻を集めた後、当館講堂にて分類を行いました。抜け殻の中で最も多く集まったアブラゼミを始め、標高の高いところに生息するコエソゼミなど、計105個の抜け殻が見つかりました。子どもたちが、地域に生息するセミの抜け殻を楽しみながら探したり分類したりすることを通して、自然環境の大切さを学んでいただけたことと思います。

夏休み！たかがりkidsキャンプ みずべの生きものさがし

令和6年8月4日(日)



長野県山岳総合センター主催のイベントとして、農具川で水辺の生き物を探すイベントに協力しました。19名の子もたちが参加し、農具川が流れ込む水路に棲む魚や水生昆虫などを網ですくって観察しました。イベントは暑い中開催されましたが、カネヒラ、オイカワ、ドジョウ、ヤゴ、チョウトンボなどたくさんの生き物を観察することができ、大盛り上がりイベントとなりました。また、捕まえた生き物たちが快適にいられるように配慮し、随時水を替えたり、カゴを日陰に置いたりすることで、生き物たちとの接し方を考えていただく機会にもなったのではないかと思います。

企画展関連催し オープニング講演会

令和6年8月10日(土)



8月10日から開催中の企画展のオープニング講演会として、国内外で活躍中のプロトレイルランナー上田瑠偉選手が、自身の生い立ちの紹介や展示資料の解説を行いました。本企画展では山岳カメラマン藤巻翔氏撮影の写真や富士山でのギネス世界記録の楯などを展示しています。

質問タイムでは多くのお客様による質問が飛び交っており、イベントをとおして、展示品の魅力はもちろん、上田選手の素敵な人柄も知っていただくことができたのではないかと思います。イベント終了後も閉館時間まで上田選手は特別展示室で来館者に解説を行ってくださいました。

企画展関連催し トレーニングキャンプ

令和6年8月11日(日)～12日(月・祝)



上田選手主導のもと2日間にわたり、上田選手の地元である大町市の山を走るトレーニングキャンプが行われました。

登り方や下り方の講習会、上田選手が使用するサングラス「ESS」の貸し出しなどがあり、プロがレクチャーするトレイルランニングを体験していただきました。2日目には当館特別展示室でのトークイベントも行っていただきました。50名ほどの来館者にご参加いただき、大盛況のイベントとなりました。

2日間をとおして、トレイルランニングや大町市の魅力を感じていただくことができたのではないかと思います。

付属園だより ライチョウの雛の生育状況

今年度は環境省主導のライチョウ保護増殖事業の一環として、9月中旬頃にライチョウの雛を中央アルプスに野生復帰させる計画に参画するため、当館では2ペアのライチョウを繁殖させました。どちらのペアのメスにとっても初めての繁殖だったのですが、順調に交尾が行われました。その結果、14個の卵をふ卵器で人工的に温め、12羽の雛が7月の3～4日に孵りましたが、残念ながらその後4羽の雛が死亡してしまいました。現在(8月下旬)8羽の雛が人の手で飼育する「人工育雛」により元気に成育しています。性別については横浜市繁殖センターでDNA判定していただいたところ、オス3羽、メス5羽ということが判明しました。孵化したばかりは20gもありませんでしたが、現在は300gを超える個体もあり、まん丸のフォルムになってきています。

野生復帰するにあたって、高山植物を消化するための腸内細菌を獲得しているかという点が重要になっていますが、1回目の検査は無事クリアすることができました。本誌が発行されるころには元気に山へ行き、厳しい山の環境のなかでも強く生きてくれるように、野生復帰を見据えた飼育に励んでまいります。(市立大町山岳博物館 学芸員 岡本 真緒)

41日齢の雛



さんぱく 山博友の会だより

当会またサークル4団体（ボランティアの会・烏帽子の会・花めぐり紀行・山岳文化研究会）の活動は、博物館公式HPでご覧いただけます。

自然観察会 北ア高瀬溪谷 湯俣噴湯丘を訪ねる

友の会主催事業として、7月21日（日）に北アルプス高瀬溪谷の湯俣で噴湯丘を訪ねる観察会（現地調査）を行いました。この時期は川の水量が多く、当日は噴湯丘を直接間近に見ることはできませんでしたが、現在活動中の噴湯丘を遠望して確認するとともに、高瀬の溪谷美を満喫しました。

高瀬溪谷の上流部、高瀬川の支流である湯俣川の湯俣水俣出合寄り下流の川原、通称「湯俣地獄」と呼ばれる場所には湯煙を立てながら温泉が湧出しています。この温泉は炭酸カルシウムを主成分としたもので、付近では温泉の沈殿物が川原の河床に堆積して盛り上がり、噴湯丘と呼ばれる火山状あるいは一部塔状になった小丘が形成されています。

現在活動中の噴湯丘は高さ3mを越していますが、その上部中央にある噴湯孔からの熱湯噴出は止まっています。本来、熱湯が噴出する噴湯孔の中には、白っぽい薄桃色をした米粒大から小豆粒大前後の丸い小石、球状石灰石（霰石（あられいし））ができます。周囲には、活動を終えて風化して黒ずんだ旧噴湯丘も残存しています。学術上、貴重な自然現象として、高瀬溪谷の噴湯丘と球状石灰石は、今から100年以上前の大正11（1922）年、国の天然記念物に一帯が指定されています。

昨年、北アルプス槍ヶ岳北麓、高瀬川上流部の湯俣と三俣山荘を結び伊藤新道が復活し、湯俣を通行する登山者も増加しました。この場所にある噴湯丘が貴重な文化財であることを知らずにいる方もおり、その保護を求める声もあがっていました。また、多くの登山者らが来訪するようになったことで、さらなる安全登山への対応なども求められています。

こうした状況から、友の会では噴湯丘周辺の現状を

知るための現地調査として、今回の観察会を企画しました。こうした調査を目的とすることから、途中の東京電力管理道路について、東京電力高瀬川事業所様から特別に車両通行許可を得ての実施となりました。

当日、徒歩出発前に観察ポイントなどを山岳博物館の千葉学芸員ら講師が説明。現地では、水俣川吊橋に大町市教育委員会による噴湯丘保護についての注意喚起看板が設置されているのを確認しました。また、山ノ神祠から下った湯俣川の河原には、三俣山荘・湯俣山荘と北アルプス北部地区山岳遭難防止対策協会の連名による「伊藤新道に入山する登山者の皆さまへ」という安全登山の注意喚起看板の設置を確認しました。

噴湯丘は自然現象として形成されたもので、自然の摂理の中で崩れていくことはやむを得ません。しかし、意図的に文化財をき損する行為は文化財保護法等に基づく処罰の対象となり得ますので、十分注意が必要です。中部山岳国立公園内にある高瀬溪谷の噴湯丘は自然が作り出した貴重な文化財であり、国民全体の財産です。その保護に努めながら、噴湯丘を含めた高瀬の溪谷美を後世に残していきたいものです。

（事務局）



お知らせ

北アルプス国際芸術祭 2024

2,400mを超える高山が連なる後立山連峰などの北アルプス北部の峰々に抱かれた大町市。ここを舞台とした3年に1度の「北アルプス国際芸術祭」が今年11月まで開催されています。

山岳博物館の前にある北アルプスを一望する大町公園にもアート作品を展示。これを含む市内各アートサイトを巡っていただき、ぜひ作品をご鑑賞ください。

■主催 北アルプス国際芸術祭実行委員会

■会期 9月13日（金）～11月4日（月・祝）

※会期中、水曜定休

■鑑賞時間 午前9時30分～午後4時30分

■開催地 大町市内の各アートサイト

■料金 作品を鑑賞するには、作品鑑賞パスポートか、個別鑑賞券を購入する必要があります。詳細はウェブサイトでご確認ください。

URL：<https://shinano-omachi.jp/>

■お問い合わせ

北アルプス国際芸術祭実行委員会事務局

TEL：0261-85-0133

Email：info@shinano-omachi.jp

編集・発行



— 創立1951年 —

〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1
市立大町山岳博物館 編集責任者 鈴木啓助
TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
✉ E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL: <https://www.omachi-sanpaku.com>

2024

秋号

第69巻3号

発行日 2024（令和6）年9月25日

印刷 有限会社北辰印刷
〒398-0002 長野県大町市大町3871-1
TEL.0261-22-3030 FAX.0261-23-2010